我が町王寺町の歴史・今！

49期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

ぼくは小学４年生のときに、この王寺町に引っ越してきたので、この町のことは家の周りのことしか知りません。だから、これを機会に自分の住んでいる町について、調べようと思ったからです。

それに、以前住んでいた町は、東京の埋め立て地だったため、歴史がなく、寺や神社がまったくなかったのです。しかしこの町にきてみれば、たくさんの歴史ある寺や神社があったので、歴史もふくめて調べようと思ったからです。

Ⅱ　研究方法

(1)　文献調査　　図書館や教育委員会、町役場に行って資料を調べる。
(2)　聞きこみ調査　この町について、くわしいと言われている人に話を聞く。
(3)　現地調査　　寺や寺院に行って調べる。

Ⅲ　研究内容

1．王寺町の歴史

王寺町は古い歴史をもつ町です。初代の神武天皇から数えて７代目の孝霊天皇（在位紀元前290～215）の御陵があることから考えると、紀元前からこのあたりに人が住みついていた、また、御陵を造るだけの文化と技術があったということです。紀元前290年と言えば、ようやく米作りが始まったばかりの頃なのに、それだけの文化があったということは、この地がその時代の文化の中心、又は、重要な場所であったということです。残念ながら、孝霊天皇については、ほとんど資料が残っていないので詳しいことは分からないのですが、その当時、この辺り一帯を治めていた葛城氏の名前が今も葛城郡という地名に残っていることから、その頃の葛城氏の勢力がいかに強大であったかがうかがえます。その強大な勢力を持った葛城氏を支えていた人々のくらしは一体どんなものだったのだろうか。

今でも王寺町にはたくさんの田畑が残っています。すぐ横を流れる大和川や葛下川はその頃からここにあったのでしょう。この大和川と葛下川の水を利用しずい分古くから木やいろいろな農作物が作られていたと思います。もちろん、生活は今のように豊かではないだろうが、ギリギリ自分たちが食べて、葛城氏などの豪族を支えるだけの力があったのだろう。そして、強い豪族のもとでまわりの小さな村々をしたがえ、だんだんと大きくなっていったのだろうと思われます。

飛鳥時代に入ると、聖徳太子の登場です。聖徳太子といえば隣町の斑鳩町にある、世界文化遺産にも指定されている法隆寺が有名ですが、王寺町にも聖徳太子が建立した達磨寺があります。また、聖徳太子が亡くなられたとき、大坂の御陵まで葬列が通っ

たという太子道が伝えられています。

飛鳥時代、王寺町は一体どのようであったのでしょうか。この時代、推古天皇、聖徳太子とならんで大きな権力を持っていたのは、蘇我の一族です。特に、蘇我馬子、蝦子親子は絶大な権力をもっていました。蘇我氏は明日香の里に大きな宮を構えていました。聖徳太子の父母である用命天皇、穴穂部間人皇女を始め、推古天皇、崇峻天皇も明日香に住んでいました。しかし聖徳太子は明日香に宮を構えず、当時でもどちらかといえば田舎というか不便であった斑鳩に宮を構えています。それは、王寺町が便利であった、というか交通の要所であったからではないかと思います。

前に、大和川や葛下川が農業や林業を発達させたと書きましたが、大和川や葛下川の役割はそれだけではありません。物や人を運ぶのです。もちろん、この地でできた農作物や木材なども運んだでしょう。しかし、それよりももっと重要なもの、知識を運んだのです。

古代の我が国の発展のために、中国からよりはどちらかといえば朝鮮半島から渡来した人々の果たした役割には非常に大きなものがあったと考えられます。大和朝廷の国内統一の4世紀の中頃から5世紀の初めにかけて、大和朝廷による意図的な帰化人配置政策がはじまるまでの帰化人は特殊な技能または職業を持った者が多く、単なる農民と思われる者はほとんど見られません。このころの大和朝廷は発展途上にあって、豪族たちと対抗しなければならないということもあり、文化を伝え、すぐれた技術を持った人々を歓迎したのだろう。そのころの帰化人の配置状態は大和を中心として、河内、山城、摂津など畿内がその大部分である。畿内に置かれたという理由は、帰化人の持つ文化や技術を朝廷が必ず手に入れて、統一への有力な手段にしようという目的があったからである。

渡来人たちは難波の港から大和川をさかのぼり、まず柏原に来て大きな船から小さな船に乗り換えなければならない。その訳は、すぐ先の亀の瀬が急流であったので大きな船ではひっくりかえってしまうからである。亀の瀬を無事に乗りこえた船は王寺でさらに小さな船に乗り換えるか一休みをする。今でも王寺町には舟戸という地名が残っているが、その頃の港を意味している。そして船は、ここから支流へと別れて行くのだ。

水路を使わずに、陸路を行くことも考えられるが、大きな荷物を背負って細い獣道を行くより、船を使って大和川を行く方が便利でさらに安全であろう。難波から明日香までは山をいくつも越さなければならない。それほど立派な道があったとは考えられない。そして、王寺まで来てしまえばもう安心である。あとは小さな支流をさかのぼるだけである。渡来人たちもここに来てやっと一息つけたのだろう。当時の大和川は今と違い、水量も豊富で一帯に葦が繁茂しており山紫水明の景勝の地歌名所として「片岡の葦田の原」は有名であった。(片岡は王寺一体の古名) 歌聖柿本人麻呂は、

あすからは若菜つまむと片岡の
あしたの原はけふぞやくめる

女流歌人　伊勢も、

片岡のあしたの原をすぎ行けば
山時鳥　今ぞ鳴くなる

と歌っている。清少納言も枕草子に「原は」と題して「たか原、みかの原、あしたの原」と三番目にあげている程である。その美しい片岡の里で、船の荷物を積み替えるあいだ、人々はようやく人心地つき、楽しく語り合ったのだろう。

また、仏教が広まると、僧尼、造寺、造仏師、造庭師、楽人など、仏教に関係の深い帰化人たちが圧倒的に多くなってくる。したがって、その人々は寺院のある所に多く住むことになる。すなわち、法隆寺のある斑鳩、飛鳥寺のある明日香、そして達磨寺のある王寺である。その頃の王寺は門前町のようだったのだろうか。大変なにぎわいであったろうと思われます。このように、王寺は交通の要所として大和川を中心に発達してきました。その後、都が平安京に移ってしまうと王寺は時代の表舞台から姿を消すのだが、吉野の木材や奈良盆地の農作物を難波に運んだり、反対に難波からの物資を運んだりするのに大和川はやはり切り離せない関係にあったのです。

このように、交通の要所であるから、王寺は発達してきたのだが、交通の要所であるがために戦火にまきこまれるということも多かったように思う。壬申の乱では、葦池をはさんで、将軍大伴吹負と壱岐直漢国とが合戦をしていますし、戦国時代には、片岡城落城とともに王寺村は寺や神社が焼き払われています。そして今は、川を利用した水運ではなく、電車やバスを利用した陸上交通の便が整っているために、ベッドタウンとして発展しています。

◦達磨寺に伝わる飢人伝説

613年12月1日、聖徳太子が王寺の片岡という地をお通りになったところ、飢えと寒さで息も絶え絶えの人が倒れていた。太子の漆黒の愛馬が何故か足を止めたので、不思議に思った太子はその飢人に名を尋ねてみました。しかし、答える気力もないのか無言のままなので哀れに思った太子は食べ物と水そして、自分の紫の衣を与えられました。斑鳩宮に帰ったものの、気掛かりなので翌日使いのものに様子を見に行かせましたが、飢人は既に死んでいました。太子は大いに悲しまれその場所に墓をたてて、手厚く葬りました。数日後、太子はあの飢人はただの人ではないことに気づき、再び使いに調べさせました。すると墓の中の死体は消え、太子が与えた衣がきれいにたたんで、棺の上に置いてありました。そして、太子はその衣を平然といつものように着られたといいます。太子はあの飢人は達磨禅師の化身であったと思い、そこに達磨寺を建て自ら達磨像を刻んで安置されました。

▲写真　達磨寺本堂

この話を聞いた一般の人々は、「聖の聖を知る、それ誠なるかな」とウワサし太子をますます尊敬したということです。

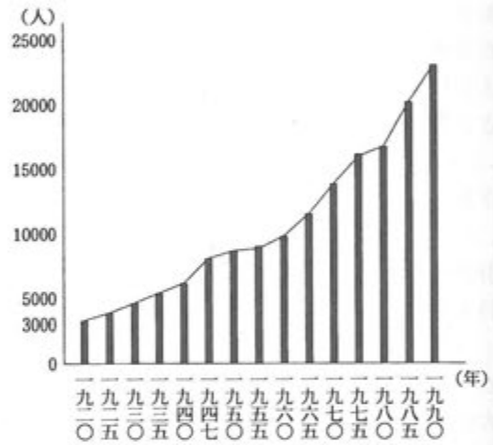
2．王寺町の現在

(1)　ベッドタウンとしての王寺

かつては水上交通の中心であった王寺町ですが、現在はＪＲ大和路線、和歌山線、桜井線、近鉄生駒線、田原本線の集まる鉄道交通の要所になっています。近隣の市町村からの乗り継ぎも多く、一日の平均乗降客数はＪＲ、近鉄を合わせて10万人弱になりこの地域の重要な輸送拠点の要としての役割を果たし、奈良県随一の旅客輸送を担っています。

大阪市内から快速で16分と交通の便利な所なので、ＪＲ王寺駅を中心に市街地が形成され、明治30年代からは住宅地開発も進み、広域の中で都市化がいち早くあらわれました。中心部は商業や行政業務の中心として機能しており丘陵部には大規模な住宅部が形成されています。これらが市街化区域に指定され町域の65％と大きな割合をしめています。

大都市のドーナツ化現象にともない人口は年々増えており、その移住してくるほとんどの人が奈良県内と大阪府からです。そして、王寺町にこれといった産業がないため、王寺町の人口２万７千人弱の内、約40％の人が町外に通勤・通学をしています。全人口の40％ということは、通勤・通学している人の大部分が町外に通っているということです。



▲グラフ１　王寺町の人口の移り変わり

道路も、国道25号線、168号線が走っており、隣の香芝市には西名阪自動車道のインターチェンジがあり、道路は一日中混雑している状態です。国道168号線は、昔のままの道を舗装しただけの片側一車線の細い道路なので、朝のラッシュ時には近隣の市町村からＪＲ・近鉄の王寺駅にやってくるバスや乗用車、オートバイ、西名阪自動車道にのるトラックなどで一杯になり、人が歩いたり、自転車で走ったりするには危なく、バイパスの計画が待たれています。

(2)　現在の問題点

人口の急激な増加に、下水道や道路の整備が追いつかず、下水のたれ流しなどによる川の汚染などが問題になっています。また、国道以外は、車がすれ違えないような細い道路が多く非常に不便で、歩行者には危ないです。新しく造成された住宅地はきれいに整備されていますが、もとからある住宅地では街灯がなかったり、下水設備がなかったりして、住み心地に大きな差があるように思います。

また、高齢者が増えているのに医療設備や福祉施設が少ないなど、いろいろな問題を抱えていますが、住民の声を聞いてなるべく早く解決してほしいと思います。

3．王寺町の未来

現在、王寺町はまわりの６町とあわせて１つの大きな市にしようという計画があります。市になると、県内では奈良市に次ぐ人口の多い市になります。この計画は数年前から進められていますが、いろいろな意見があり、また利害関係も複雑に入り組んでいてなかなか難しいみたいです。

賛成意見、反対意見の代表的なものは、次のようなものです。

賛成意見

- 図書館やホールなどの施設が１つですむので経済的である。
- イメージがよくなる（例えば、町役場より市役所の方がかっこいい）。
- 道路や公園などが整えられる。
- 役場が一つになって経費が節約される。

反対意見

- 住民の意見が反映されにくくなる。
- 都市整備にかたよって、地域の良い伝統が失われる。
- 斑鳩や平群などの愛着のある名前がなくなる。
- ＪＲの駅前にある王寺町が市の中心になってしまい、端の方にある町は行政から取り残されてしまう。

この７町合併が行われると、生駒郡という１つの郡がなくなってしまうほどの大きな規模です。王寺町の人達はＪＲ王寺駅、近鉄王寺駅、新王寺駅があるので、自分たちがどうしても町の中心になってしまうのであまり心配はしていないが、現在の町の人口も少なく、鉄道駅からも遠く離れている安堵町の人々の中には不安に思っている人が多いのではないだろうか。また、王寺町は新興住宅街が多く昭和40年以降に他の土地から移住してきた人が多いので、町の名前や今の町作りに愛着があまりないが昔ながらの生活をしている町の人々には反対意見が多いと思う。

どのようにやれば一番いいのかは分かりませんが、もっと時間をかけて、住民の意見をじっくりと聞いて、なるべくたくさんの人が納得できるような市を作ってほしいと思います。

Ⅳ　結　　論

王寺町は大和川を中心に水上交通の要所として発達して来ました。そして今は、鉄道を中心に陸上交通の要所として、また、大都会のベッドタウンとして発達しつつあります。町制70周年の今年、今度は奈良県では二番目の大きな市へと、新しいステップを踏み出そうとしています。いろいろと難しい問題がたくさんあるので、なかなかスムーズにはいかないようですが、これからも我が町・王寺を見つめていきたいと思います。

Ⅴ　総　　括

寺や神社がたくさんあったので、歴史から調べ始めましたが、調べれば調べるほどもっともっと知りたい事が出て来てきりがありませんでした。また、古い文献が多かったので読んでも意味が分からなかったりして困りました。

王寺町の歴史を研究している元学校の先生や元王寺町の教育委員会の委員長という人

を紹介していただきいろいろとお話しを伺ったり、石包丁などを見せてもらったりしたのが楽しかったです。

◦参考文献

・達磨寺物語　(1994)　米田重義
・畠田民族散歩　(1993)　辻田政信
・王寺町史　(1969)　王寺町役場
P 143～P 147、P 154～P 156、P 632～P 637
・広域圏の将来についての住民意識調査　集計結果報告書（1993）
王寺周辺広域市町村圏協議会
・片岡城跡　(1984)　上牧町教育委員会
・各種パンフレット（1995）　王寺町役場
・ほっとタイムズ　(1995)　ほっとタイムズ編集部
・ＪＲ内部資料　(1995)　ＪＲ西日本